

塚本 善隆 著

「中国仏教通史」第一巻

三 桐 慈 海

塚本善隆博士によって「中国仏教通史・第一巻」が著わされたが、これには二つの大きな意義があると思われる。

中国佛教史として著述された書籍は、従来にも数多く見ることができ。近くは平楽寺書店出版の「佛教史概説・中国篇」や道端良秀博士の「中国佛教史」があり、以前には常盤大定博士や境野黄洋博士が著わされた佛教史もある。そしてそれらの佛教史にはそれぞれに個性があり特色があつて、それに応じ我々後学の者は入門の手引きとして或は資料の参考として、その恩恵に浴しているわけである。しかし岡部和雄氏によって本書の書評（中外日報6月1日附）の中で注意されているように、また「中国佛教の道しるべ」(本誌第2号所収・横超慧日教授稿)にも記されているように、それらの従来に著わされている佛教史だけでは、現在佛教を学ぶ者にとって必ずしも充分であるとはいえない。且つ通史や概説というものは、もともとが学者の特殊研究の累積を基礎とするものである点からいえば、学者によってそれぞれの視点においてより多く著わされていしかるべきものであるから、その意味では従来ある佛教史が決

して数多いということにはならないであろう。先の「佛教史概説・中国篇」が初版として出されたのは既に昭和29年のことであり、その前後には龍谷大学編「中国佛教史」、高雄義堅博士著「中国佛教史論」、小笠原宣秀博士著「中国佛教史綱要」等が出版されているが、近いところで他にはみられない。そしてそれらのいずれもが比較的簡略であつたり、問題点が限定されていたりして、総合的で詳細な中国佛教の通史ではなかった。このような現状の中で、今度の大著の第一巻が出版されたということは、これは学界において久しく待望されていた所に応えたものといつてよい。

著者塚本善隆博士は現在京都市博物館の館長として活躍されているが、久しく京都大学の人文科学研究所で中国佛教の研究を専攻してこられた。博士の学問業績は「支那佛教史研究・北魏篇」をはじめとして「唐中期の浄土教」「日支佛教交渉史研究」「魏書積老志の研究」等の著書並びに多くの研究論文がある。また各分野の専門学者による共同研究の成果を編集せられた「暁論研究」を見ても知られるように、博士は常に京都における中国佛教研究の中心的存在であつた。そうした博士によって著わされたこの中国佛教通史には、自から本書独自の面目がうかがわれる。

著者はまず序文の中で、本書が著作された意図や成立の経過についてくわしく述べられている。著者によれば「広い各階層の中国人民が伝来佛教を彼らの思想信仰実践体験として如何に受容してきたか」ということ、及び「近代まで中国社会の宗教

として「佛教」の名で普及し、各方面の生活や文化に如何に影響を与え行われてきたか」ということへの探求であった。また「佛教が東洋文化史の上に重要であることは誰も知りながら、日本東洋学会に佛教を東洋の思想、文学、歴史、経済、美術、信仰の重要な流れとして広く包摂した東洋学が起こらず、佛教だけが広い東洋学から孤立におかれ」ていることに對する反省に基くものであつて、著者はこれを日本の佛教学者の責任であるとしておられる。かくて一般東洋学者に對しても、また佛教学者に對しても、両者にとつて資益するような中国佛教の通史を提供したいというのが著者の願ひであつた。即ちそれは東洋学と中国佛教学を綜合させた東洋文化史の大成ということなのであらう。

本書著作の計画は中国佛教通史全四巻の予定のもとに着手せられたという。その中の第一巻である本書には、中国への佛教の流伝から始めて東晉末の般若学の興隆までを記されており、それに釈道安の研究が一章にまとめられて、本文七章五四〇頁、巻末の注記九一頁、索引二二頁とより成つてゐる。

本書の叙述は王朝の順を追つてその時代の發展様相を述べるという方法をとつてゐる。それは王朝を軸としてその時代の佛教に關連するあらゆる問題が取上げられたもので、各時代の史実に對する背景や後世への影響を見るには便利であり、いわば各章それぞれがまとまつた一つの論文となり、それが年代順に配列されてゐる感がある。しかし反面には著者自らも認めておられるように、各章相互に反復が非常に多いことも事實であり、

通読する者にとって負担に感ずることはまぬがれないであらう。

本書の特色の一として挙げるべきは、注記にみられるように、資料文献を一括して多く列挙したことである。この注記は本書に教材としての役割をも持たせることになっていて、後進のためによき導きとなるところが大きい。ただこの注記の中には佛教学者の研究を挙げることが比較的に少ないということと、注の意味が本文の論旨を補うというよりも、本文中の記述に對する資料の提示に止まつてゐるということが感ぜられる。これは注が本文とは別に作られたという事情にもよるのであらう。

著者は本書をもつて入門書としての意味と通史としての意味とを兼ねるものとしておられる。入門書という点からは専門的予備知識を持たぬ者にも読解できることが必要であり、通史という点からは広く深く大局を見きわめた史觀に立つての論述が求められることになる。この二つの要求を同時に充たすということは、長い間この研究を続けてきた學者にしてはじめてなし得るところであり、決して容易な業ではない。慾をいえば今少し重点的な記述と教義思想への大綱的展望が得られたならばと思われるけれども、しかしこれだけの詳細なまた博い視野からの中国佛教通史が出たということは、確かに今日の日本における中国佛教学の水準を代表するものといつてよいであらう。次に内容の上での特色と思われるものを、本文中の章をおつて概略紹介することにしよう。

第一章 序説中国佛教の特殊性——その性格を

規制したもの

この章では先ず初にインド・西域における佛教の展開と中国思想の変遷が概観されていて(第一節)、中国へ異質の文化であるインドの佛教が受容されたことによる特殊性が注意せられている。その特殊性としては、教義的には大乘小乗と異った佛教が別途に流入し、地域的にはインドをはじめ西域諸国から雑然と伝来し、時間的にはそれらが不統一に長期わたって流入しているということが挙げられ、著者はこれを「複数佛教」と称しておられる(第二節(1))。また受容の可能性として、中国に流入した佛教が佛像や塔を中心とする礼拜佛教であったこと(第二節(2))と、後漢時代の国教的な儒教の後退に対する神仙方術的な道教の勢力の拡がり(第三節)とが指摘せられている。以上の諸点は既に学界で注意せられた所でもあるが、礼拜佛教ということを他の二点と並べて取上げられているところに著者の野心的見解がうかがわれる。

ところで教義的地域的な「複数佛教」ということは、確かに著者のいわれる如く中国佛教を規制し性格づけて、後の教判を生みだす要因となっているに相違ないが、筆者は時代的な面で断続的に流入したということを挙げてみたいが如何であろう。中国への佛教の流入はいかにも長い期間を通して行われてきた。しかしそれが決して絶えず連続して来ているのではない。一人の佛教伝来僧が中国で經典の翻訳や宣教を行う。その時直接に指導を受けた中国人達は、一度その指導者を失うと続いてその後を継ぐ指導者を得ることが困難であり、自分たち中国人だけの間で暗中模索を繰返さなければならなかった。しかもいつの

時代でもインドから来た僧たちは教義上權威をもって中国社会に迎えられた。そこに中国佛教がインド佛教とは異質のものとなって展開した別の要因があると私は考えるのである。もしこれが山河の障壁なくして西域と中国との間に絶えず自由に往来交通が行われていたならば、また違った様相を示していたと思われる。外来の佛教指導者を連続して得られなかったということは、たしかに中国にインド的な僧伽・教団が発達できなかった原因となっている。僧伽はインドでは自然に形成されたであろうが、もともとそのような基盤のない中国では連続して指導者が必要である。中国における隠逸と出家には共通性が見出され易いかも知れない。しかしインドにおける出家と中国における出家との間には、意味の上で大きな相違があることを否定できない。暗中模索は佛教の中国化に至らざるを得なかったであろうし、僧伽が発達し難いことは大乘佛教を優位に導かざるを得ないであろう。このようなことから、私は断続的な佛教の流入が中国佛教形成の要因と考えたいと思うものである。

次に佛教が神仙方術的なものとして受容せられたということ、これに対しては別に異論はない。だがこれも、中国思想の中ではみられなかった輪廻転生・因果応報の思想の伝来と受容をもってして、中国における儒教の後退と道教の発達という歴史的な動向との関連の上に考えることができるのであろう。人間の素朴な感情における輪廻説・因果応報説の浸透ということ、それが中国の人々の心を動かすものがあったからこそ、それに近い神仙方術に託して受容されたと考えることができないであらう。

うか。両者の相違点も問題にしてみたい。大先輩の著述を拝見した機会に些か併せて卑見を申し添えさせていたたく。

第二章以後第六章までは王朝順の記述になる。

第二章 佛教初伝期——後漢の佛教

第三章 三国時代の佛教

第四章 西晋（二四五—三一六）の佛教

第五章 南北朝族国家の佛教興隆

第六章 江南東晋（三一七—四二〇）の佛教興隆

各章に亘る記述の共通した方針としては

1、政治社会状況の概略（統治者と佛教）

2、中国思想の動向（排佛者と奉佛者）

3、佛教界の活動（僧俗の奉佛者並びに寺院の実態）

となるようである。そして本書全体を通じては、殊にその時代に活躍した人々の事蹟が中心となって述べられているように思われる。

第二章は前半に中国への佛教初伝の問題と、後半に後漢の安世高・支婁迦讖らの佛典伝訳について取上げられている。

第三章では道教の動勢と玄学の新興が社会状況との関連において述べられている。荀粲・王弼・何晏・嵇康・向秀等の知識人の動きと、佛典翻訳者としての曇柯迦羅・康僧鑑・曇帝・白延・朱士行について述べられ、呉の佛教では支謙の訳経と康僧会の宣教が中国佛教形成の大きな役割を担うものとして詳述されている。

第四章の前半では西晋の時代になると文献に奉佛者の記載が

増加することを述べ、中国の奉佛者を指導する者が帰化外国人の二世を中心としていることに注意されている。後半では竺法護の訳経宣教活動と、竺叔蘭について詳述されている。

第五章は石勒・石虎によって帰依された佛図澄が中心となる。その門下の漢人僧を隱逸型、講義佛典型、求道実践型の三種の類型に別けている。

この講義佛典型の中で格義佛教について言及されているが、格義ということの明確な規定が示されていないようである。

「中国に佛教が実践され流布される限りは、彼らがどの程度にか格義的佛教解釈をつづけつつ、中国のそれぞれの時代に応じた中国人の宗教あるいは哲学として、彼らの社会にまた彼らの生活に密着して生命をつづけてゆくものであることも否定できない」ただし格義的解釈が翻訳佛典の原典的本義を誤ってゆく危険もきわめて多い」と述べられている。ここにいう格義的とはどのようなことか、肝心の説明が充分でないので入門者には誤解されやすいのではないかと思われる。佛教を理解するために中国思想をもって考える者と、佛教思想を表現するために中国思想の用語をもつてした者と、実は二面に分けられ性格を異にするのでないかと思うが、格義という術語が明瞭に定義づけられないままに用いられているのは、どのように受けとればよいのであろうか。

第五章は目次にもみられるように、内容が多岐にわたる。貴族佛教の成立、玄学の流行、梵唄の流入、竺道潜と支道林で代表する中国僧、羅什以前の般若学の展望、建康の佛寺の状況、

儒佛道の関係、尼僧教団の成立、そして多くの翻訳者の伝来等である。またこの章には鄒超の「奉法要」の訳文がのせられている。通史の中でこれだけのスペースをとるところ、本書の性格からもそれがよほど重大だと考えられたのに由るものであろう。

第七章 中国佛教史上の道安

釈道安は中国佛教を真の意味で形成した人として、佛教史上に特筆されるべきであろう。道安には佛教教団の成立、戒定慧の三字の重視、般若經の比較研究と探究、衆經目錄の編纂等、中国佛教への貢献は非常に大きい。そのためにもこの一章が別

設されていることには充分な意義があるであろう。本章は道安の生涯を三期に別けて順次に詳述され、道安の兜率天弥勒信仰で章を閉じられている。百頁に近い本章は宇井伯寿博士著「釈道安研究」等と並ぶ道安研究の成果であろう。道安研究については横超慧日教授がその著「中国佛教の研究」やその他の論文の中で多く述べられているところであり、殊に五失本三不易については独自の見解を発表されているけれども、本書の著者は全くこれに言及されていない。

（昭和四十三年刊、鈴木学術財団、A5版、三、〇〇〇円）